

クシャン王朝下のジャイナ教信仰に関する一考察

高 橋 堯 英

はじめに

紀元 1～3 世紀の西北インド・北インドはクシャン王朝の支配下にあった。この王朝下、urbanization が進み 28 の大都市が栄えていたというが、季節風利用の発見などによってシルクロード貿易の通商路上の拠点としてインダス川河口の海港都市が利用されるようになり、クシャン王朝支配下にあったこれらの諸都市を中心に経済活動が更に刺激され、都市と都市を結ぶ通商が更なる発展をみて、未曾有の繁栄が興ったとされる。この小論では、この外国人為政者の支配下で、仏教と同じく飛躍的発展を遂げていたジャイナ教に目を向けてみたい。ジャイナ教関連の彫刻類と碑文を検証し、クシャン時代のジャイナ教信仰の様相を明らかにしてみたい。

1. マトゥラー

7 世紀の玄奘三蔵は、カピシャに裸形の行者（ジャイナ教の僧侶）がいたと述べ¹⁾、ジャイナ教がアフガニスタンにまで伝わっていたことが知られている。タキシラの古代都市跡シルカップを発掘した J. マーシャルは、シルカップの北門の左側のエリアにジャイナ教のストゥーパが存在した可能性を述べている²⁾。しかし、ジャイナ教信仰の形跡を顕著に残しているのは、北インドの拠点都市マトゥラーである。碑文資料³⁾は、紀元前 2 世紀頃にはジャイナ教がマトゥラーに存在していたことを伝えている。伝承では、マトゥラーは第 21 代ティールタンカラ Naminātha の誕生の地とされ、第 22 代ティールタンカラ Neminātha は、クリシュナとバララーマの従兄弟とされ、その像には必ず両者が共に刻されている。このように、マトゥラーはジャイナ教にとって特別な場所であったようで、特に Kankālī Tilā 丘から、34 体ものティールタンカラ像が発見されている。

2. ジャイナ教関連の遺物

クシャン時代のジャイナ教信仰を考えるにあたり、その資料は、ティールタンカラ像や神像などの彫刻、そして碑文である。先ず、彫刻類について見てみよう。

1) ティールタンカラ像: インドの美術史家 N. P. Joshi は、クシャン時代にマトゥラーで製作されたティールタンカラ像について9つの特徴を挙げる⁴⁾。

- ①ジナ像は総て *kāyotsarga mudrā* を示す立像と *dhyāna mudrā* をした座像のみ。
- ②ジナ像の頭部は、剃髪か小さな巻き毛を有し、眼球は描かれないこと。
- ③耳たぶが肩に接しないこと。
- ④表情は無表情で感情を露わにしないこと。笑みを浮かべるもの希に存在する。
- ⑤座像の足の裏に *triratna* と *dharma-cakra* が描かれ、手のひらには法輪のみが描かれ、胸には、*śrīvatsa* (吉祥相) が描かれること。手足の指の指先前面に *śrīvatsa* 等が描かれるものもあり、仏教美術の影響と考えられる。
- ⑥中世に特に利用されるようになった *lāñcana* と呼ばれる識別マークは、まだ使用されていない。ティールタンカラ像では初代の *Ādhinātha* と第23代の *Pārśvanātha* は、前者が両肩にかかる頭髮の房で、後者は蛇の頭の後背によって区別され、*Neminātha* 像はクリシュナとバララーマが傍らに立って表現されることから識別することが可能。
- ⑦殆どが裸形像。しかし、わずかながら、*ardha-phālaka sect* の像 (ラクナウ州立博蔵 J12, J14, J623 など) も存在する。
- ⑧座像はしばしば獅子座上に座す形であること。
- ⑨幾つかのティールタンカラ像の頭後背には半月が連続する縁取りがある。

像容に関して、Joshi は別の論文で、マトゥラー地域で発見されたティールタンカラ像119体の内、93体が座像で、26体が立像であることを明らかにしている⁵⁾。仏像とは異なり、施無畏印、說法印、触地印をとるものはない。後のジャイナ教の伝承では、これらティールタンカラ像は解脱時の姿を表現したものとされ、*Rṣaba*, *Neminātha*, *Mahāvīra* は座した姿で、他のティールタンカラらは立った姿で解脱した、とされる。しかし、*Rṣaba* の座像も存在するので、クシャン時代の彫刻家には別の解釈が行われていたと考えられている。

N. P. Joshi は、クシャン時代の特徴的ティールタンカラ像として、マトゥラー博 Acc. No. 00.B69 のような *Sarvatobhadra* 像の存在を指摘している⁶⁾。この種の像は28⁷⁾体発見されており、一本の柱の四面に別々のティールタンカラ像を刻

(256) クシャン王朝下のジャイナ教信仰に関する一考察 (高 橋)

んだもので、特に、初代 Ādhinātha 像、第 23 代 Pārśvanātha の姿は必ず描かれるという。この像の形式は、後のバラモン教の神像彫刻に影響を及ぼしたという。

2) 神像: ジャイナ教彫刻に現れる神々について、N. P. Joshi は、

- ①子供の誕生を司る山羊の頭をした Negameśa (Harinegameśin). クシャン時代以降は、この神の単独像は造られなくなったという。
- ②山羊の頭をし、同様に子供の誕生に関わるといわれる女神 Revatī (Ṣaṣṭī).
- ③ Sarasvatī 女神 (ラクナウ州立博蔵)
- ④ティールタンカラ Neminātha 像の両脇に描かれる Kṛṣṇa と Balarāma. クリシュナは、二臂又は四臂で描かれ、バララーマは蛇の頭を形取った頭後背を有し、手にフラスコを持ったり、両手で合掌する姿で描かれる。

ラクシュミー女神像の足の部分も発見されており、ティールタンカラ像の台座には、腕に畳んだ布を戴く裸形の出家者が描かれるものも存在する。

3) Āyāgapatta: クシャン時代のジャイナ教独特な遺物は、幅 50 ~ 70cm, 高さ 1m 弱の āyāgapatta という一種の板碑である。マトゥラーから 25 枚が発見されている。表面に様々な緻密な文様やストゥーパ等が刻されたこれら石板は、ストゥーパなどの周辺で、高い壇の上に据えられ、礼拝の対象とされていた。

その代表例は、ラクナウ州立博蔵 J250 で、円の中に、4 つの śrīvatsa で囲まれたジナ像が中心に配され、植物の巻きひげで表現された svastika が描かれ、植物の巻きひげが作る円の中に svastika, śrīvatsa, 一對の魚、玉座 (bhadarāsana) が描かれる。それらを取り囲む円環に天女らが描かれ、四方点にストゥーパ、聖樹、ジナ像、そして何らかのシンボルが描かれている。四隅には、その環を支える上半身が女性で下半身が蛇の姿の人物が描かれている⁸⁾。マトゥラー博蔵の āyāgapatta (Q2) には円筒形の下層基壇の上に上方基壇を有するサンチー型のストゥーパが描かれ、ストゥーパの両脇にヤクシニーが塔に寄りかかるように立つ姿で描かれている。トーラナと欄楯は上層基壇上に設けられ、階段がトーラナに導く。階段の両脇には壁龕が設けられ、右側に男性像と男の子が、左側に女性像が刻まれている。「Arhat Vardamāna に捧ぐ。遊女 (ganikā) の長である Lavaṇasobhika の娘で、遊女 (ganikā) Vasū が、彼女の母と、彼女の娘、息子と家族全体とともに、Arhat への供養のために、Arhat の祠堂、礼拝堂、貯水タンク、奉獻板を Nirgarnta Arhat の聖域に建立した」という碑文が刻される⁹⁾。ラクナウ州立博物館蔵の別の āyāgapatta (J255, 赤色砂岩, 69.5cm X 52cm) にも、同様なストゥーパのトーラナと欄楯部が描かれている。ブラーフミー碑文が刻され、断片ではあるが、「Arhats

たちへの礼拝のため、踊り手 (nataka) である Phaguyaśa (Phalguyaśas) の妻 Śivayaśā (Śivayaśas) によって板碑が作られた」(Lüders List no. 100) と記されている。

3) ジャイナ教のストゥーパ: マトゥラー市郊外の Kankālī Tīlā 丘は, Harding, Cunningham, Growse, Burgess, Führer らによって発掘され, この地にはジャイナ教のストゥーパが実在したことが知られている。上述の Āyāgapatṭa に描かれたストゥーパは, このストゥーパを模したものと考えられている。

ジャイナ教の塔に関しては, 14 世紀の Jinaprabha の *Vividhātīrthakalpa* という作品で, マトゥラーに言及する部分に, Kubērā 女神が第7代ティールタンカラ Supārśvanātha の為に黄金のストゥーパを建立したと述べられているという¹⁰⁾。10 世紀の *Brhatkathākośa* という Digambara 派のテキストは, マトゥラーにはジャイナ教のストゥーパが5基存在していたと伝え, グプタ期の Paharpur Copper Plate (AD.478) には *pañcastūpa-niyaka* という語が刻まれており, この5基のストゥーパが実在したことを示していると考えられている¹¹⁾。

Kankālī Tīlā 丘の発掘は組織的なものでなかったので発掘の報告書は存在しない。しかし, V. A. Smith は Führer の残した資料を整理して図録を出版し, シュンガ王朝に遡ることの出来るジャイナ教の寺院跡とストゥーパの存在を報告している¹²⁾。この図録の図版 (plates I, III) の縮尺をもとにこの寺院と塔を推測すると, この寺院は東西約 240 メートル, 南北が約 150 メートルの境内地を有し, そのストゥーパは, 内部に放射状に配された支壁から考えると直径約 18 メートルの規模であったと思われる。用いられた焼き煉瓦は大小様々で, 大きいものは縦横約 37.5cm, 厚さ約 15cm で, 小さい煉瓦は幅 17.5cm, 厚さ 5cm であったという。

3. ジャイナ碑文

このような塔や彫刻は, クシャン時代の社会繁栄の恩恵を得た社会の富裕者層によって寄進されたものである。Satya Sharva の *Dated Kuṣāṇa Inscriptions* (Pranava Prakashan, New Delhi, 1993) に掲載された年代の解っている碑文 211 点と時代不明の6点の計 217 碑文の内, クシャン時代のジャイナ教関連碑文はカニシカ王の4年から88年まで, 66点存在する¹³⁾。内2点は, サカ時代か後期クシャンのものとも考えられるが, それらを施者, 施物, 願文, 現れる出家者, 出家者の系統などを踏まえてリスト化してみると以下のような興味深い点に気がつく。

1. クシャン時代のジャイナ碑文は, 殆どが Kankālī Tīlā 丘出土の遺物に刻されていたもので, Kankālī Tīlā 丘がジャイナ教信仰の中心であったこと。

(258) クシャン王朝下のジャイナ教信仰に関する一考察 (高 橋)

2. 年代の判明している碑文の殆どが女性によって寄進されたものであること。中には、夫婦で、夫がヴァルダマーナ像、妻がその台座を寄進したような碑文 (Satya Sharva, *Ibid.*, no.138) もあるが、66 例中 35 例の施者が女性による寄進である。ジャイナ教信仰における女性の役割の大きさが伺える。
3. 複数の碑文に見られるように、今回検証した碑文 66 例の殆どが、在家信者を指導する出家者が在家信者に、ティールタンカラの中の特定の像を建立するように具体的に指示して制作されたものであるということ。例えば、カニシカ暦 49 年の碑文¹⁴⁾ は、Ārya Vridhahasti 長老の請いを受けて、在家の女性信者 Dinā が Nandyāvarta の尊像を建立したことを伝える。クシャン時代の仏教碑文には、例えば北インド最大の山岳伽藍があったカラワーン出土チャンドラビー優婆夷の寄進銘文¹⁵⁾ には、アゼス王の 134 年 (A.D. 77 年) に、ダルマ長者 (gr̥hapati Dharma) の娘で Candrabhī 優婆夷がこの地の屋塔 (gr̥ha-stūpa) に舍利を奉安したことを伝えているが、ジャイナ教碑文に普通に現れるような、施者に指導していた出家が特定の施物を寄進するよう要請する内容はない。仏教碑文にはこのようなケースは見られない。
4. ジャイナ教碑文には、出家者の系統をしっかりと明記するスタイルが定型化していること。検証した 66 例中 45 例にこの事実が認められた。自らが指導を受ける出家者が、～という高僧の弟子である、～という gaṇa の長である、～という gaṇa に属する～kula, ～śākhā に属するという系譜を明記している。このことは、ジャイナ教の在家信者の間には、自らの信仰の系統 (門流や支派) に対する強い帰属意識があったことが考えられる。
5. 後代の *Kalpasūtra* には、8 つの gaṇa が述べられるというが、マトウラーの碑文には、そのうち、① Kottīya, ② Vāraṇa 又は Cāraṇa, ③ Ārya-udekiyā という 3 つの gaṇa があらわれ、Mehika or Maigika kula の存在から④ Vesavadiya という第 4 の gaṇa も存在したことが解っている¹⁶⁾。このような gaṇa はジャイナ教団の門流であると考えられ、それぞれの gaṇa が人の名や地名に由来する kula や śākhā という支派・系統で分かれていた。マトウラーのジャイナ教碑文は、それら以外に sambhoga という支末系統も存在したことを伝えている。以下は碑文に現れる門流・支派の表である。

gaṇa	kula	śākhā	sambhoga
Koṭṭiya	Brahmadāsi Sthāniya (Thāniya) Sthāniya (Thāniya) Sthāniya (Thāniya) Pavaha	Ucchenāgari vajrī vajrī vajrī Mahjama	Śrīkiya Śrigrha
Vāraṇa (Cāraṇa)	Āriya Hātikiya Āriya Hātikiya Pushamitriya Pritivarmika Ayyabhyista Aryavariya	Vajranāgari Vajranāgari Samkāsiya Haritamālakadhi	Sirikiya Āryaśrīka Srigriha
Ārya-udekiyā (Dhikyā)	Nagabhutikiya Paridāsika	Pariputrikā	
Vesavadiya	Mehika (Maigika)		

仏教碑文では、「説一切有部の諸師の所領として」「飲光部の諸師の所領として」「大衆部の諸師の所領として」等の記述はみられるが、必ずといって「四方僧伽の所領として」といった一文が添えられ、部派を示さぬ碑文も多く、特定の部派への帰属意識が強いとは思えない。しかし、ジャイナ教では、在家信者にとって信仰の拠り所である師僧の系譜、系統と門流・支派への帰属意識が非常に強かったと思われる。

6. ジャイナ教団では、gaṇa は gaṇin と呼ばれる教団の長によって統率されていたらしい。また、碑文には vācaka と呼ばれる説法師が存在したことを伝える。長老の出家者は ācārya と呼ばれ、弟子たちは antevāsi 又は śiṣya と呼ばれ、女性の弟子は antevāsinī 又は sāvikā と呼ばれていたらしい。男性の在家信者は śrāvaka で、女性の信者は śrāvikā と呼ばれていた。
7. この時代の仏教碑文は、在家信者名と施物を述べ、寄進の目的として「(統治している) 王の健康と繁栄のため」「一族の繁栄のため」「父母の成仏のため」「一切衆生の安楽のため」という具体的な目的が述べられるが、ジャイナ教銘文にはそのような願文が希薄で、「成就あれ」といった願文や、諸々のティールタンカラの「礼拝のため」といった願文が専らであった。「一切衆生の安楽のため」といった願文も 66 例中 6 例存在するが、その一文が定型化してはならず、廻向思想は希薄であったと思える。
8. ジャイナ教碑文の施者には、村長 (grāmika, Satya Sharva, *op.cit.*, no.86.), 長者 (śreṣṭhin, *Ibid.*, no.41.), 香水作り職人 (ghandika, *Ibid.*, nos.74, 79, 139, 156.), 金細工師 (*Ibid.*, no. 152.), 鍛冶 (lohakāra, *Ibid.*, nos.50, 119, 121.), 大工 (vaddhakin,

(260) クシャン王朝下のジャイナ教信仰に関する一考察 (高 橋)

ibid., no.38.), 隊商の長 (Sārthavāha, *Ibid.*, no. 54.), 宝石商 (maṇikara, *Ibid.*, no.50.), 踊り手 (nataka, Luders List no. 100) 等の職種が見られる。同時に、遊女にも上述の Āyāgapaṭṭa を寄進した Vasū のように, Vardamāna の祠堂, 礼拝堂, そして貯水タンクなどを寄進できるような裕福な者もいたことが興味深い。出家者による寄進も 2 例認められた。

9. Kankālī Tilā で発見されたサラスヴァティー像 (ラクナウ州立博物館収蔵番号 J24) が示すように, この女神がジャイナ教徒に何等かの機能を以て受け入れられていたことが解る。広脚をしたその像容からは, ヒンドゥー教の Sarasvatī Pūjā における学問・技芸の女神という機能よりは, 財宝・豊穡を司る女神 (弁財天) 的機能が重視されていたことが想像出来る。
10. マトゥラーで発見された仏教碑文には, Pravārika-Vihāra (外套製造業者の組合の寺), Kaṣṭikīya-Vihāra (材木商組合の寺) といった, 業者の組合が出資して作った, 又は組合が管理する寺院の存在が見受けられ¹⁷⁾, 西インドの仏教碑文から, このような組合に富裕者層が富を信託投資し, その利子が寺院への布施に用いられていたことが知られており, 仏教寺院の護持に商業組合が密接に関わっていたことが知られている。バラモン教関連でも, 同様な組合への信託投資の利子を用いた寄進を示す碑文¹⁸⁾ も存在するが, クシャン時代のジャイナ教銘文にはこのようなシステムの存在を示唆するものはないようで, 信者個々人が, 自らの信奉する出家者に帰依を表明するものが殆どで, 商業組合が媒介する寄進に関しては不明である。

おわりに

クシャン時代のマトゥラーでは, Kankālī Tilā 丘を中心として, ストーパーや Āyāgapaṭṭa の崇拝, Āyāgapaṭṭa に描かれたシンボルや様々なティールタンカラ像の崇拝をジャイナ教信仰が営まれていた。専ら禅定印をした座像のティールタンカラ像が作られ, Sarasvatī や Lakṣmī 女神, クリシュナ神やバララーマがその信仰に関わる神々として人々に礼拝されていた。マトゥラーのジャイナ教団には当時 4 つの門流があり, それぞれが幾つかの支派に分かれていた。在家信者たちはその門流・支派への帰属意識を強く保ちながら, 出家者からの強い要請と指導に従って寄進を行っていたらしい。ディガンバラ派とスヴェータンバラ派の分派もおこっていたらしい。寄進者はクシャン時代の繁栄の恩恵を享受した職人や商人たちの妻や女性たちが主であったが, 仏教碑文に顕著な作善の功德を他者に廻向

するような願文は見られず、自らの信仰の深化を目指すための寄進が為されていたようである。仏教にあったような、商工業者の組合が維持管理する寺院はジャイナ碑文には現れず、優婆塞・優婆夷らは個人として、門流やその支派への強い帰属意識を保ちながら、その信仰を護持していたと考えられる。

- 1) S. Beal, *Si-yu-ki*, Munshiram Manoharlal, Delhi, 1964, p.55 & n.197.
- 2) 拙論, 「タキシラのストゥーパに関する一考察」, 『印度学仏教学研究』第45巻2号, 日本印度学仏教学会, 平成9年3月, pp. 167-171 参照.
- 3) *EI*, II, p.196.
- 4) N. P. Joshi, *Mathurā Sculptures*, Sundeep Prakashan, New Delhi, 2004, p.19.
- 5) N. P. Joshi, "Early Jain Icons from Mathura," *Mathura-the Cultural Heritage*, American Institute of Indian Studies, New Delhi, 1989, p.339.
- 6) N. P. Joshi (2004), *loc.cit.*
- 7) N. P. Joshi (1989), p.332 & Appendix VIII.
- 8) Lucknow State Museum J250: S.D. Trivedi, *Masterpieces in the State Museum Lucknow*, State Museum, Lucknow, 1989, p.41.
- 9) H. Lüders, *List of Brahmi Inscriptions*, Indological Book House, 1973, no. 101.
- 10) V.K.Sharma, *History of Jainism*, D. K. Print world (P) Ltd., New Delhi, p.123.
- 11) *Ibid.*, pp.134-135.
- 12) V. A. Smith, *The Jain Stupa and Other Antiquities of Mathura*, Indological Book House, Delhi, 1969 [reprint].
- 13) Satya Sharva, *Dated Kuṣāṇa Inscriptions*, Pranava Prakashan, New Delhi, 1993, nos. 15, 20, 21, 24, 25, 26, 27, 29, 33, 34, 38, 41, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 53, 54, 55, 60, 67, 69, 70, 72, 74, 77, 79, 80, 86, 90, 92, 108, 109, 110, 111, 112, 119, 121, 123, 124, 126, 128, 129, 130, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 145, 146, 147, 148, 151, 152, 154, 155, 156, 157, 163, 164.
- 14) *Ibid.*, no.110.
- 15) *Kalawān Copper Plate Inscription of the year 134* (『静谷目録』 no.1745.)
- 16) B. N. Puri, *India under the Kushanas*, pp. 150-51; V. K. Sharma, *op.cit.* pp. 155-159.
- 17) Dalpt-ki-Kirki Mohalla Buddha Image Pedestal Inscription of the year 14 (H. Luders, *MI*, p.116f., § 81; 『静谷目録』 no.622) & Mathura Museum Bodhisattva Image Pedestal Inscription of the year 16 (H. Luders, *MI*, p.191f., § 157; 『静谷目録』 no.653).
- 18) *EI.*, XXI, pp. 55ff., No. 10.

〈キーワード〉 クシャン朝, ジャイナ教, ティールタンカラ像, āyāgapattā

(立正大学教授, Ph.D. [Delhi])